日本大学　歯学部

レントゲンと医療

歯学部に行ってみて

私は今回のフィールドワークを通して身近であるがゆえに理解していると思っていた歯医者の仕事やレントゲンについて自分の知識が浅かったと知り、詳しく学ぶことができました。

これを通じて私は、レントゲンが普及する前は歯内部や歯茎の内側などの疾患についてはどのように判断、状況把握していたのだろうか、そしてレントゲンが普及したとき具体的にどのような影響があったのだろうかと疑問に思いました。

疑問点についての調査結果

レントゲンが発明される前は、医師は主に視診や触診などによって診察を行っていました。しかし、これらの方法は炎症や痛みなどの症状が現れてからでないと異常に気づきにくく、体の内部の状態を正確に知ることはとても難しいものでした。特に骨や歯の内部の病変は外から見えないため、病気が進行してから発見されることもありました。

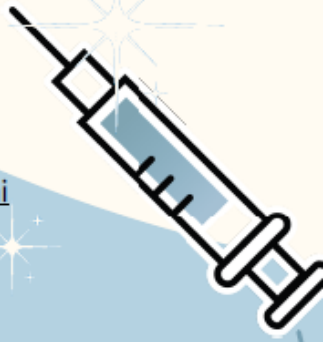
1895年にヴィルヘルム・レントゲンがX線を発見したことで、体の内部を画像として確認できるようになり、これまで見えなかった異常を早い段階で見つけられるようになりました。

この発明は医学界全体に大きな衝撃を与えただけでなく、歯の内部や顎の骨の状態を詳しく確認できるようになったことで歯学界にとても非常に重要な出来事だとわかりました。

感想・まとめ

今回のフィールドワークの事前・事後学習を通して、これまで何気なく受けていた診察のすごさに気づきました。レントゲンも当たり前のように感じていましたが、当時は体の中が見えるというとても画期的な発明で、多くの人を救ってきた技術だと知り、驚きました。

今ではその技術が私たちの生活に自然と溶け込んでいますが、そこには長い歴史と努力があることを学び、医療の見方が少し変わったように感じました。



参考文献

https://n-harvest-dc.com/blog&news_detail?actual_object_id=471
https://www.is-dc.jp/blog/2024/08/25/post-69/ https://ortho-dontic.net/column/5434/
https://manamidentalclinic.com/blog/%E6%AD%AF%E7%A7%91%E6%B2%BB%E7%99%82%E3%81%AE%E9%80%B2%E6%AD%A9%E3%81%A8%E6%9C%AA%E6%9D%A5/
inaguma-sika.com